

### 【マリガヤハウスインターン自己紹介】

マリガヤハウスでは特定営利法人アイセック・ジャパンを通してインターンを受け入れています。今年も夏休みを利用して多くのインターンが活動に参加してくれました。皆さん色々な思いを持ってフィリピン来て、JFC母子が抱える問題を学びながら、どのように支援へ関わっていくか、日々模索しながらも頑張ってくれています。現在は、婚外子のための日本国籍取得手続きに関わってもらい、書類翻訳や母子と一緒に在フィリピン日本大使館での申請手続きを行ってくれています。



私は、名古屋市立大学国際文化学科2年生のチョン・スンイルです。実際NGOで働いてみて、様々なことが学べてとても勉強になりました。後は、現地での生活も楽しめて、貴重な経験が出来てとてもよかったです！



私は、静岡大学情報学部4年生の太田悠由です。マリガヤハウスを通して、JFCのことを学びたいと思いインターンに参加しました。こフィリピンでの経験を将来の生活でも、職場でも生かしたいと思っています。



私は、神戸大学国際文化学部4年生の川上裕子です。様々な経験をして視野を広げたいです！個人的にもフィリピンの地で、精神的に成長したいです。現在、JFCのために何ができるか模索中です。



私は、津田塾大学国際関係学科3年生の大場しなのです。移民やフィリピンの社会問題に興味をもっており、東京事務所でもボランティアをしていました。少しでもマリガヤハウスに貢献したいと思っています。



私は、県立広島大学人間文化学部3年の吉岡恵です。日本で学んだことを実践する良い機会となっています。マリガヤハウスに貢献するために最後まで走り抜けようと思います。



私は、南山大学経済学部2年生の鬼頭由里加です。マリガヤハウスのインターンを通じて学んだJFC問題やフィリピン社会の問題を日本に帰ってから積極的に伝えていきたいと思いました。



私は、名古屋大学情報文化学部2年生の瀬戸聡海です。発展途上国に対して興味をもっていたのと、子どもたちを助けるボランティアがしたかったのでマリガヤハウスでの研修を決めました。



私は、東京大学文科1類1年生の白井慎一郎です。JFC問題はとても根深く、継続的な支援が必要だと感じました。この夏の貴重な経験を自分の糧としてこれからの大学生活、社会人としての生活を頑張りたいです。

パ グ                      ア サ  
PAG-ASA

JFC 奨学金基金報告  
パグアサー夢・希望  
2012 年9 月号

スタディーツアーメンバーと共にワークショップ開催

JFC 奨学生は、8 月 3 日に JFC ネットワークのスタディーツアーのメンバーと共に、エコパークにてワークショップを行いました。今回のワークショップでは、日本からのスタディーツアーメンバー 7 人と共に、チームビルディングのゲームと国籍確認訴訟の原告を応援するメッセージボード作りをしました。今年も、エコパークというマリガヤハウスから少し離れた広い公園でのワークショップ開催であったこともあり、JFC たちは遠足気分、終始笑顔でワークショップに参加していました。

チームビルディングのゲームでは、日本人のスタディーツアーメンバーと言葉が通じない中で、どうコミュニケーションを図り、チームを形成していくかを学びました。このゲームでは、風船を膨らませて、セロテープのみで風船タワーを作り、どのチームが一番高いタワーを作れるか競争しました。風船は 3 つの大きさが用意されており、それをいかにセロテープで貼りつけて組み合わせていくかがこのゲームのカギになります。途中、風船が複数割れるハプニングがあり、JFC たちは少し驚いていました。それでも、彼らは風船が好きようで、とてもうきうきしながら、カラフルな風船タワーを作ってくれました。



JFC の中には、彼らの言葉が通じない日本人とコミュニケーションを図ったのは初めての子も多かったはずですが、彼らはそれでも、ジェスチャーを使い、思考錯誤しながらもどうコミュニケーションを図っていくかを一生懸命考えながら、スタディーツアーのメンバーと接していました。例えば、風船を膨らませる人、風船を組み立てる人を決めるときも、風船を膨らませたり、組み立てるジェスチャーをしながら、役割分担を決めていました。

言葉が通じないなかで協力しなければならないという壁を乗り越えたからこそ、JFC たちは、風船タワー完成後達成感に溢れていました。どのチームも自分たちのタワーに満足し、ゲームが終わった後もチームのみんなで楽しそうに過ごしていました。このワークショップが彼らにとって、言葉が通じない中でどう人と接し、協力していけるかということが学ぶ機会になれば幸いです。

午後からは、国籍確認訴訟の原告団を応援するワークショップを開催しました。まず初めに、弁護団代表の近藤博徳弁護士から、この訴訟に関する説明がありました。訴訟の話となると、小学生には難しく感じられますが、どのJFCも話を聞いているうちに意識が高まったようで、真剣な顔つきになってきました。お母さん同士も、隣に座っているお母さんと話し合いを始めたし、この訴訟へ向けて団結していかなければいけないという意識が高まったように感じられました。最後にマリガヤハウスの河野さんが「この訴訟に向けて、みんなでまとまって原告を応援していこう」といったところ、みなそろって首を縦に振り、「Yes」と言っていました。



いました。

このメッセージボードは、さらにマリガヤハウスのインターン生が飾り付けをし、マリガヤハウスに掲示してあります。JFCやお母さんからのメッセージカードをシャボン玉に見立て、それが原告に届くことを目指しています。このメッセージボードは、マリガヤハウスに数多くある掲示物のなかでも、唯一JFCとお母さん自身が書いたものであり、マリガヤハウスの訪問客の目を引くものになっています。

近藤先生からのお話を聞いた後、みんなでこの訴訟を応援するメッセージを書き、それを大きな紙へ貼り、まとめました。メッセージを書いた後、みんなで発表し、それぞれの思いを共有しました。特に小学生のJFCの原告からの「これからも裁判に向けてがんばります！」という意気込みはとても心強かったです。そのほかにも、「My dream will come true」といった、前向きで、今からがんばろうとしている意気込みを数多く聞くことができました。JFCやお母さんにとっては、日本人からの応援がとてもうれしかったらしく、スタディーツアーメンバーが発表するたびに、それをとても嬉しそうに聞いて



今回のワークショップでは、その場面でもJFCたちは終始笑顔で、日本人スタディーツアーメンバーを含む、さまざまな人との交流を楽しんでいました。彼らは、このワークショップで、言葉が通じない中でのコミュニケーションの取り方や人と協力すること、同じ境遇にいるJFCたちと団結することなどを学ぶことができたのではないかと思います。それが今後の彼らの生活の中に生きていけばと思っています。彼らがいつか、Light and Right(光と権利)を得ることを、これからも応援し続けたいと思います。

(文責:マリガヤハウスインターン 大場しなの)